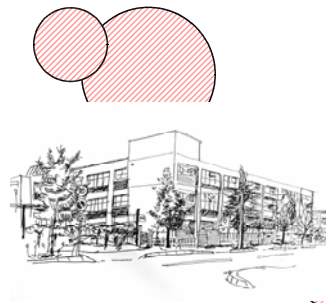


明星中学校だより

知と和と粘り



〒 070-0025 旭川市東5条1丁目

Tel 0166-26-0468

Fax26-0469

E-mail: myojyo@myojyo.jhs.asahikawa-hkd.ed.jp

■発行責任者 校長 増茂 薫 ■発行日 平成24年11月5日 ◇第16号◇

快挙！3年4組 阿部瑚々さん 指揮者賞 小倉一桜さん 伴奏者賞 二つを独占 旭教研音楽部小中音楽発表会

弁論の精鋭 論旨も態度も見事

	弁論発表者	論題
1年生	岩山 史弥(1の3)	「あたりまえのことに感謝」
	高本 圭河(1の2)	「いじめとは」
2年生	横山 絢乃(2の2)	『1992※4##111』の魔法」
	中田 有沙(2の1)	「マカロン」
3年生	奥山 怜菜(3の4)	「食文化の壁」
	岩田 玲実(3の1)	「言葉の責任」

学年弁論発表で選ばれた、明星祭弁論発表出場者

夏休みの課題となっていた弁論。提出の条件をビタリとそろえた生徒がほとんどなのですが、中には文の構成に苦勞し提出が間に合わず担任の先生を困らせた生徒もいたようです。全員が学級弁論に参加して、弁論の苦勞を共有しているからこそ、明星祭当日は、6人の精鋭の発表に全校生徒が集中しました。講評の平間先生の言葉の意味も、よく理解することができたように思います。ここまで選抜された皆さんは、全員が金賞なのですが、そのなかから「私の意見発表会」に奥山怜菜さん(3の4)が選ばれ、10月25日、永山中にて堂々とした発表をしてくれました(全文は、下記のとおり)。市内中学校から11人が集い、大勢の保護者や学校関係者・永山中生徒を前にして、練習以上の立派な態度で臆せず発表した奥山さん、拍手です。

10月31日、文化会館大ホールに本校3年4組の「十字架(クルス)の島」が響きわたりました。18校の最後から2番目。学級合唱のレベルを超えた合唱、との高い評価を得



左：阿部さん 右：小倉さん

ました。学級委員長の工藤君は、「…(明星中では)僅差で金賞となり、今日、歌うチャンスももらいました。だからこそ、学校に残っている仲間のために心をこめて…歌い上げます。」と。結果、この発表会史上初の指揮者・伴奏者の同時受賞。実質的に「一席」の栄冠に輝きました。3ヶ月に及ぶ、長い朝練にやっと終わりが来ました。校内外からの絶賛を胸に、絆づくりを大切にしてきた心意気は、これからもいろいろな場面で発揮されるはずですよ。

食文化の壁

三年 奥山 怜菜

「犬は食べ物です。」みなさんは、この言葉を聞いてどのように感じますか。私の率直な気持ちは可哀想だなどというものと、犬を食べることが考えられないというものでした。しかし、他の国の人と同じ視線に立ち、冷静に考えてみると、私たちも同じことをしているのです。クジラ。昨今、日本ではこの生き物を中心とした大きな問題が起こりました。それは、商業捕鯨や調査捕鯨に反対するシーシェパード環境保護団体が日本の捕鯨船に対して、暴力的な直接行動を取ってきた出来事です。有害化学物質である酪酸入りの瓶を投げ付けたり、スクリューにロープを巻き付ける、船体に体当たりをしたりするといった行動は、乗組員の生命を脅かすものであり、絶対に許されません。日本には、古くから鯨肉を食用とする歴史があり、現在も店頭でクジラのベーコンが売られているのをたびたび目にすることがあります。しかし、この光景は異文化の人たちの目に痛々しく映っていました。そうです。異文化の人たちにとって、クジラは食べ物ではないのです。このような食文化の違いで、問題が引き起こされてしまったのです。昨今起こった問題は、テレビや新聞で大きな話題となり、私も報道番組で多く目にしました。その中でも強く印象に残っている映像があります。真っ赤に染まる海。あの映像を見たとき、同じ日本人とはいえ、鳥肌が立ちました。

人は動物を食べなければ生きてはいけません。それなのに、なぜ動物が死んでいく場面を見ると情が移ってしまうのでしょうか。それは、例えば人その他の動物の形が異なっていて、言葉が通じないとしても、今を生きる同じ生き物だからだと私は考えます。私たちが今いるこの地球の上で、全てのもが同じように呼吸をし、同じように生きているのです。

地球には、それぞれ違った考えを持つ人が多くいます。それは、文化も同じです。世界には、数え切れないほどの食文化が存在しています。

では、食文化の違いから引き起こされる問題を無くすためには、どのようにすれば良いのでしょうか。色々と考えを巡らせてみましたが、やはり最終的にはどうすることも出来ないという結論に達しました。あの動物を食べることを禁止しようというきまりは、それぞれの人が生きていく文化の中だけのきまりであり、他の文化が干渉することは出来ないのです。全ては文化の違いによって軋轢が生じるのであり、その溝を埋めるのは並大抵なことではないと思います。ただ、文化が異なっているとしても、一人ひとりが自分たちのために食となった動物に感謝の気持ちをもつことが出来ます。その気持ちをもてる生き物が人なので

す。

これまで私は、食について深く考えたことがありませんでした。しかし、あるとき韓国に犬肉を食用とする文化があると聞いたことがきっかけで、食文化について考えるようになりました。みなさんも、韓国には犬料理があると聞いたら、私と同じような気持ちを持つ人がいるかもしれません。しかし、かつて日本も犬肉を食べていました。犬肉を食べるなんて可哀想だとか、信じられないといった気持ちを抱いても、日本にもこのような食文化が存在し、消えていったのです。世界でも、日本のように時間の移りかわりと共に食文化が変わった国が多くあるのではないのでしょうか。例え歴史の上で食文化が変わってしまったとしても、食となった動物に対する感謝の気持ちだけは、いつまでも忘れてはいけません。

人は食べ物を食べなければ必ず死んでしまいます。人と食は深い運命にあるのです。人として生まれたからには、食となる動物へのありがたさを噛み締め、与えられた人生を一杯、生きていくべきだと思います。

■発行責任者 校長 増茂 薫 ■発行日 平成24年11月5日 ◇第16号◇